

## 「ブラジル移民発祥之地」の碑と旧「神戸移住センター」

山本通3丁目



旧神戸移住センター全景



ブラジル移民発祥の地の碑

「ブラジル移民発祥之地」の石碑が立つ正面の建物が、旧「海外移住事業団神戸移住センター（通称、神戸移住センター）」の建物で、つい三十数年前までは、まさに日本のブラジル移民の基地だった所なのである。

1908（明治41）年4月28日、「笠戸丸」が781人のブラジル移民を乗せて神戸港を出航したのが、ブラジル移住の最初であり、その時以来、神戸港はブラジル移民の出発港となった（神戸港移民船乗船記念碑の項参照）。アメリカへの移住が明治30年頃に門戸を閉じたため、その代替地として急浮上したのがブラジル。日露戦争後の戦勝ムードの中でブラジル移民は始まったものの、その後の第一次世界大戦後の大不況により、政府は人口問題解消策と失業者救済のためにブラジル移民を奨励していった。

1928（昭和3）年3月、ブラジル移民の保護と教養を目的として、「内務省神戸移民収容所」を設置、六百床で食堂、医務室、講堂を備えた、外観を外航船の造りにまねた一部五階建ての建物を開設した。今でも、居室の一つの壁に移民の一人が書いた故郷日本との別れを告げる「別離の言」というタイトルの文章が残されている。なお、この収容所を舞台にその様子を克明に描いた小説が、石川達三の「蒼氓（そうぼう）」で、彼はこの作品で第一回芥川賞を受賞している。

「内務省神戸移民収容所」はその後何度か改称され、最終的には1963（昭和38）年、「海外移住事業団神戸移住センター」となった。この移住センターは、1971（昭和46）年5月末、最後の南米移住船「ぶらじる丸」が出港したのにもない、その歴史に幕を閉じたのである。



外航船の内部をまねたらせん状の階段

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

## 「ブラジル移民発祥之地」の碑と旧「神戸移住センター」

山本通3丁目

戦前戦後を通じ、640隻の移民船が神戸・ブラジル間を往復し、約25万人の人々がブラジルへと移住していった。「ブラジル移民発祥之地」の碑は、1979（昭和54）年に建てられたもので、碑の石材はブラジル在住の兵庫県人会有志から贈られたものである。

旧移住センターの建物は閉鎖の翌年から1994（平成6）年3月まで神戸市医師会の准看護婦学校として使用されていたが、学校移転で空きビルになった状態で、阪神・淡路大震災を経験することになった。

震災後は、近くで被災した神戸海洋気象台がこの建物を1995（平成7）年4月から1999（平成11）年9月まで利用していた。同年11月からは芸術家の創作・交流活動の場（CAP HOUSE）としての活用を契機に建物の保存が決定し、現在は「海外移住と文化の交流センター」として外国人支援や国際芸術交流活動のほか、移住関係の資料を展示する「移住ミュージアム」が設置されている。

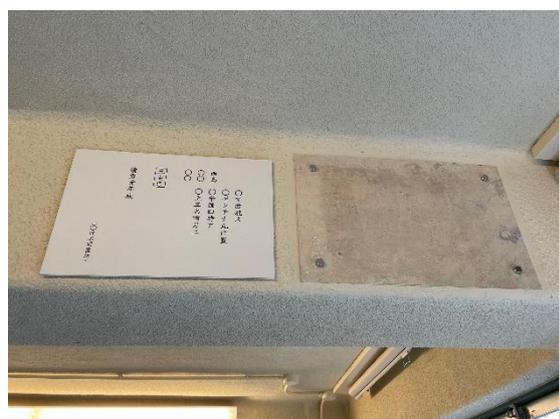
場所：神戸市中央区山本通 3-19-8



建物内部



移住ミュージアム



渡航直前の青年が壁に書いたと見られる文書